

医歯薬学研究部だより

徳島大学大学院 医歯薬学研究部

Institute of Biomedical Sciences,
Tokushima University Graduate School

Vol. 1
2015年4月1日

- 1 巻頭言
医歯薬学研究部長 苜原 稔
- 2 大学院医歯薬学研究部組織
- 3 副研究部長就任挨拶
- 4 特別寄稿
理事(研究担当) 野地 澄晴
- 6 勝沼奨学基金設立について
医科学教育部教育・研究委員長
勢井 宏義
酵素学研究拠点シンポジウム報告
疾患酵素学研究センター 木戸 博
- 7 旬の研究紹介
生体材料工学分野 教授 濱田 賢一
- 8 総合研究支援センターニュース
動物資源研究部門 松本 高広
- 9 医療教育開発センターニュース
- 10 AWAサポートセンターニュース
徳島大学AWAサポートセンター長
山内 あい子
- 11 「国際交流のタベ」開催報告
国際課蔵本分室 国際コーディネーター
村澤 普恵
- 12 新任教授ご挨拶
- 13-14 学会賞等受賞者紹介
- 15 研究部市民公開講座開催報告
機能分子合成薬学分野 大高 章
スキルス・ラボ 7&8
(総合研究棟)のご案内
医療教育開発センター長 赤池 雅史
- 16 学会情報
退職教授等一覧
編集後記



巻頭言 「ヘルスバイオサイエンス研究部」から「医歯薬学研究部」へ
医歯薬学研究部長 苜原 稔

平成16年(2004年)4月に発足してから11年が経過する「ヘルスバイオサイエンス研究部」の名称を、平成27年4月から「医歯薬学研究部」に変更することに致しました。併せて英語名称も変更し、「Institute of Biomedical Sciences」にします。さらに分野の部門配置も、医科学部門(5系41分野)、口腔科学部門(3系26分野)、薬科学部門(4系20分野)、栄養科学部門(1系8分野)、保健科学部門(3系24分野)にまとめ、新しく産官学連携部門(2系、7分野)を加えて、学部との一体的な配置として解りやすくしました。

今回の変更の目的は、1) 漢字を使った研究部名称を採用し外部から解りやすくすること、また同様に、医学、歯学、薬学が混在している部門・講座の配置を、解りやすい部門・系の配置にすること、2) 現在進んでいる大学改革プランに並行して研究部組織の改革を加速する必要性から、将来の再編に備える体制を作ること、3) 第三期中期目標中期計画を睨んで教員・職員の人心の一新を図ること、にあります。

本研究部が発足した平成16年当時は、大学院化を文部科学省に申請する過程で、医科学、栄養生命科学、口腔科学、薬科学の4研究科の横断的な研究体制の構築を主眼とする目的から、部門配置も4研究科を混在した状態となりました。この主旨を生かすため、HBS研究部内で積極的に研究的交流や共同研究を推進し、特に教育クラスターによる研究者の交流や小豆島リトリート、共同でのシンポジウム、市民公開講座などを開催して、一定の成果を得ています。しかし、大学改革の中で、徳島大学全体を作り替える必要があり、蔵本キャンパスでも徳島大学のエンジンとして、組織を作り替える必要があります。そのために、一度リフレッシュすることが必須であると考えます。また長年、「ヘルスバイオサイエンス」という比較的珍しい名称を使用していましたが、多くの人たちから名称が理解されにくい、誤解を生みやすい、名称が長いなどの意見が寄せられていました。さらに、保健科学が追加になり、分野数も増加しました。このような経緯があり、教職員の理解を得て変更を致します。ご理解の程、宜しくお願いします。一日も早くこの名称に慣れ、定着するように努力致します。

蔵本キャンパスのような生命科学に携わる研究者の最終目標は、国民の健康を増進・維持させるために、疾病に対する有効な診断法を探索し、治療法や予防法を開発することにあります。長年馴染んだHBS研究部の名称は消えますが、新しく医歯薬学研究部となっても、その根底に流れる蔵本キャンパスの生命科学の目的をしっかりと見据えて、プロフェッショナル集団として、有意義な成果を適正に世界に発信されることを期待しています。

最後になりましたが、本年2月に研究部長選挙があり、私が再任されました。次期の2年の任期ですが、皆様方のご支援を得て、新しい医歯薬学研究部の組織改革を開始させていただきたいと思っております。

大学院医歯薬学研究部組織

(平成27年4月1日～)

部門	系	分野名	
医科学部門	生理	顕微解剖学	
		機能解剖学	
		細胞生物学	
		統合生理学	
		薬理学	
		生化学	
	病理	病態生理学	
		病態病理学	
		疾患病理学	
		生体防御医学	
	社会医学	微生物病原学	
		法医学	
		予防医学	
		人類遺伝学	
	内科	医療教育学	
		血液・内分泌代謝内科学	
		消化器内科学	
		呼吸器・膠原病内科学	
		腎臓内科学	
		循環器内科学	
		臨床神経科学	
		難治性神経疾患病態研究	
		腫瘍内科学	
		精神医学	
		小児科学	
		皮膚科学	
		放射線医学	
		医療情報学	
		臨床薬剤学	
		外科	消化器・移植外科学
			胸部・内分泌・腫瘍外科学
			心臓血管外科学
	泌尿器科学		
	脳神経外科学		
	運動機能外科学		
	麻酔・疼痛治療医学		
	救急集中治療医学		
	眼科学		
	耳鼻咽喉科学		
	産科婦人科学		
形成外科学			
口腔科学部門	基礎歯学		口腔顎顔面形態学
			口腔組織学
		口腔微生物学	
		分子医化学	
		分子薬理学	
		口腔分子生理学	
		生体材料工学	
		口腔分子病態学	
		予防歯学	
	臨床歯学	歯科保存学	
		歯周歯内治療学	
		口腔顎顔面補綴学	
		顎機能咬合再建学	
		口腔内科学	
		口腔外科学	
		口腔顎顔面矯正学	
		小児歯科学	
		歯科放射線学	
口腔保健学	歯科麻酔科学		
	総合診療歯科学		
	地域医療福祉学		
	口腔保健衛生学		
	口腔保健教育学		
	口腔保健支援学		
	口腔機能管理学		
	口腔保健福祉学		

部門	系	分野名	
薬科学部門	生命薬学	医薬品病態生化学	
		医薬品情報学	
		医薬品機能生化学	
		衛生薬学	
		薬物治療学	
		薬物動態制御学	
	統合医薬創製科学	神経病態解析学	
		生薬学	
		分子情報薬理学	
		有機合成薬学	
創薬科学	生物有機化学		
	創薬生命工学		
	分子創薬化学		
	機能分子合成薬学		
総合薬学教育学	薬品製造化学		
	製剤分子設計学		
栄養科学部門	医科栄養学	創薬理論化学	
		分析科学	
		臨床薬学実務教育学	
		総合薬学研究推進学	
		分子栄養学	
		生体栄養学	
		食品機能学	
		予防環境栄養学	
		実践栄養学	
		代謝栄養学	
	臨床食管理学		
	疾患治療栄養学		
	保健科学部門	看護学	看護技術学
			看護教育学
看護管理学			
療養回復ケア看護学			
ストレス緩和ケア看護学			
臨床腫瘍医療学			
子どもの保健・看護学			
生殖・更年期医療学			
女性の健康支援看護学			
メンタルヘルス支援学			
放射線科学	地域看護学		
	学校保健学		
	助産学		
	放射線理工学		
	医用理工学		
	医用画像情報科学		
	医用画像機器工学		
	医用画像解析学		
	画像医学・核医学		
	放射線治療学		
医用検査学	生体機能解析学		
	微生物・遺伝子解析学		
	病理解析学		
	細胞・免疫解析学		
	総合診療医学		
	地域総合医療学		
	心臓血管病態医学		
	脊椎関節機能再建外科学		
	分子難治性疾患学		
	地域医療人材育成		
産官学連携部門	寄附講座	がん細胞と代謝学	
		共同研究講座	

副研究部長 就任挨拶



副研究部長【口腔科学教育部長】

河野 文昭

平成27年4月から、医歯薬学研究部副研究部長(歯学系)、口腔科学教育部長を担当させていただくことになりました。苛原 稔研究部長のもと医歯薬学研究部の発展に努めていく所存です。

蔵本地区には5大学院教育部、大学病院、疾患酵素学研究センター、疾患プロテオゲノム研究センターがあり、医療系クラスターに代表されるような研究の連携が医歯薬学研究部の強みであり、医歯薬学研究部の最大の特色です。その強みを十分に生かしながら、持続的な「競争力」を保ち、高い付加価値を生み出す機能強化に研究部長とともに取り組みたいと思います。

さて、口腔科学教育部では、本年度、博士後期課程口腔保健学専攻の設置が認められ、すべての教育課程が揃いました。本教育部の特徴として歯科医学分野だけでなく保健福祉関連分野があることが挙げられます。そこで、医療と保健福祉の連携をキーワードとした研究・教育の中心的役割を果たし、学内外の連携を進めながら、世界に羽ばたく研究者、高度専門職業人の育成を目指していきたいと考えております。

皆様のご支援、ご協力をよろしく申し上げます。



副研究部長【栄養生命科学教育部長】

二川 健

平成27年4月より医歯薬研究部副研究部長・栄養生命科学教育部長を担当させていただきます。栄養学科は、学科創設50周年を契機に「医科栄養学科」と改組し臨床系の新分野(疾患治療栄養学分野)を設立し、病院栄養部と共同で臨床栄養学の教育をより発展させる体制を構築しました。次は、大学院の改革の番です。我が栄養生命科学教育部は、我が国で最初の栄養学大学院であるという自負の基に、さらに教育・研究レベルを高めていけるように制度改革を行っているところです。幸いにも、栄養生命科学教育部は前期(修士)課程および後期(博士)課程とも定員を超える学生諸君が入学してくれていますし、その卒業生は国内外で大いに活躍されております。私の任期中の目標としまして、その栄養生命科学研究部の恵まれた環境と歴史を基盤に、さらに質の高い研究者育成を目指したいと思います。具体的には、大学院後期課程での病院における臨床栄養学研修や国内外の研究センターとの連携による人的交流などを行う所存です。それらを通して疾患の原因を解明し、それを栄養学的に予防・治療しようとする研究者(スーパー管理栄養士)を育てたいと考えています。さらに、徳島大学大学院は栄養系だけでなく、医学系、歯学系、薬学系、保健学系と健康科学に関するすべての研究コースが備えられています。その特徴を生かして、健康科学全般に通用する人材も育てていく所存です。最後になりますが、現在の日本の研究環境は厳しい競争原理のもとにあります。徳島大学がその競争に打ち勝つためにも、医歯薬学研究部副研究部長として一所懸命頑張る所存ですので、ご指導・ご助言の程よろしく申し上げます。



副研究部長【薬科学教育部長】

大高 章

平成27年4月より前期2年に引き続き研究部副研究部長(薬学系)・薬科学教育部長を担当させていただくことになりました。苛原 稔研究部長のもとHBS研究部から衣替えした医歯薬学研究部の発展に努めてまいりたいと考えております。

さて、第2期中期目標・中期計画期間も本年度末で終了し、来年度からは第3期期間に入ります。第2期の後半からは改革加速期間として、様々な改革への要請が矢継ぎ早に出され、持続的な競争力を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学を選抜しようとする第3期への助走期間となっていました。新たに衣替えした医歯薬学研究部におきましても、研究部構成員一丸となって自主的・自立的な発展を促す仕組みを構築する必要があります。施設の共用化、講義の分担化・共通講義の設定、IPE教育の推進、共同研究の推進…列挙すると必要な取り組みは枚挙にいとまがありません。改革推進にむけて構成員各位の積極的な参加が不可欠ですが、改革プランは全国的に見ても金太郎飴的な状況になっていることも否めません。金太郎飴では負けてしまいます。研究部構成員皆様からの斬新なアイデアの提出をもとにし、医歯薬学研究部が国立大学改革の“Game Changer”になる取り組みが不可欠であると考えております。皆様のご支援、ご協力がいただけますようよろしくお願い致します。



副研究部長【保健科学教育部長】

近藤 和也

2013年の4月より副研究部長(保健科学教育部長)に就任し、2017年3月まで継続することになりました。よろしくお願い致します。保健科学教育部は、大学院博士前期(修士)課程が設置され8年、大学院博士後期課程が設置され6年が経過し、修士の学位は73名が取得し、博士の学位は9名が取得しています。超高齢化社会の到来に伴い医療ニーズが急速に増大する中で、今後の医療を支えるためには、より効果的・効率的な医療の提供が求められています。高度専門職医療人の育成では、大学病院と密な連携をとり、シームレスな教育体制を構築します。看護学領域では、がん専門看護師コース、助産実践コース、養護教諭専修免許コースを充実・発展させるとともに脳神経看護専門看護師コースを開設します。医用情報科学領域では、医学物理士とともに放射線治療技師、MRI 検査技師、核医学専門技師を育成します。医用検査学領域では、超音波技師や胚培養士を育成します。今年2月から地域医療人材育成分野(寄附講座)が設置され、地域医療に貢献できる看護師を育成していきます。昨年、ロクシン先生を教授として迎え、グローバル化を推進する準備は整い、修士課程にinternational nursing advanced courseを作り、学生および教員の英語を強化し、若手教員の留学を推進します。外国(エジプト、フィリピン、タイ、インドネシア、フィンランド、モンゴルなど)からの研究者を博士課程に受け入れ、保健科学教育部のグローバル化を推進していきます。

徳島大学改革の進行状況について

■ 理事(研究担当) 野地 澄晴

1. はじめに

グローバルな競争社会の中で、日本はどのように発展するのが問われており、また日本の社会の大問題である「少子高齢化」にいかに対応するかが問われています。日本の国立大学はこれらの大問題を解決するためのキーとなる組織であり、またそうでなくてはなりません。現在の政府は、現在の国立大学はそのような国を救う組織としては不十分であり、「何とかしなければならぬ」という危機感を抱いています。その事が、政府からのトップダウンの国立大学改革要求に繋がっています。平成25年6月20日に下村文部科学大臣から国立大学長に対して、「今後の国立大学の機能強化に向けての考え方」が提示され、平成25年11月には国立大学改革プランを発表され、「持続的な“競争力”を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学へ」改革することが要求されています。これに対応して、徳島大学においても、香川学長の下で「徳島大学機能強化プラン」および「徳島大学改革プラン」が策定され、現在もそれに基づき着実に改革を実行していただいております。

教職員の皆様のご努力が大学改革を成功に導いています。実際、文部科学省は「平成26年度国立大学改革強化推進事業」として11大学の事業を選定しましたが、徳島大学の事業(図1参照)もその一つとして選定されています。

2. 蔵本キャンパスの改革について

蔵本キャンパスにおける現在予定されている改革は、先端酵素学研究所の2016年度の設置です。徳島大学の疾患酵素学研究中心の前身は、1961年に設置され、華麗な伝統を持つ研究センターであり、徳島大学の発展に多大な貢献をしてきました。例えば、センターで研究された藤井節郎先生、勝沼信彦先生の御業績は、蔵本キャンパスに設置された記念ギャラリーにおいて紹介されています。元センター長の市原明先生はご退職されましたが、センターで研究された田中啓二先生は、現在、東京都医学総合研究所長で文化功労者として2014年に顕彰されました。前センター長の木戸博先生は現役としてご活躍です。一方、1998年に疾患プロテオゲノム研究中心の前身

●図1



が設置され、免疫、ガン、糖尿病、ミトコンドリアなどの分野の研究に世界的な業績を上げてきています。さらに、2010年には徳島大学糖尿病臨床・研究開発センターが設置され、2013年には藤井節郎記念医学センターも設置されました。これらのセンターはもちろんそれぞれのミッションを達成するために設置されたのですが、各センターとも最終的なゴールは同じ「生命の真理の追求、ヒトの健康の増進、疾患の克服」であることから、各センターの壁を無くし、より強固な共同研究体制を構築し、さらに発展するための体制が必要です。そこで、センター群を統合して研究力をアップし、一つの研究所として徳島大学の研究をアピールしてゆくことを計画しています。研究所の名前は、歴史と伝統のある“酵素”を維持して命名されました。疾患酵素学研究センターは、平成22年度から“全国共同利用・共同研究「酵素学研究拠点」”として認定されており、平成27年度はその最終年度になります。徳島大学としては、先端酵素学研究所が全国共同利用・共同研究の拠点となるように、新規に申請する予定です。研究所やセンターの研究者は医歯薬学研究部に属し、また各学部、教育部において教育も担当していただけるようにしていただきたいと考えています。これらの組織改革を基盤として、蔵本地区の教育研究がさらに発展するような仕組みを作っていただくことを期待しています。

3. 常三島キャンパスの改革について

常三島地区の組織改革についても、簡単に現在の状況を紹介します。国の発展に寄与するイノベーションを起こすため、工学系の教育研究の改革が要求されています。基礎から応用まで幅広く教育研究できる改革を行うために、「工学の教育研究の要素に理学を、理学の教育研究の要素に工学を」との概念に基づき、工学系と理学系の関連教員を集積し、理学・工学を融合した教育を行う学部、理工学部を2016年度から新設する予定です。現在準備しています。一方、日本の1次産業が抱える問題はTPP交渉の場面からも顕著になっているように、日本の今後の発展を左右する重要な問題です。この問題に対応するため、徳島大学の得意な分野である医歯薬学の教育研究と連携し、縦軸にヘルス、フード、アグリを、横軸にバイオテクノロジーを組み合わせ、関連する産業を担う人材を育成する新学部、生物資源産業学部を2016年度から新設する予定です。この新学部は、工学部の生物工学科の担当者、総合科学部の関

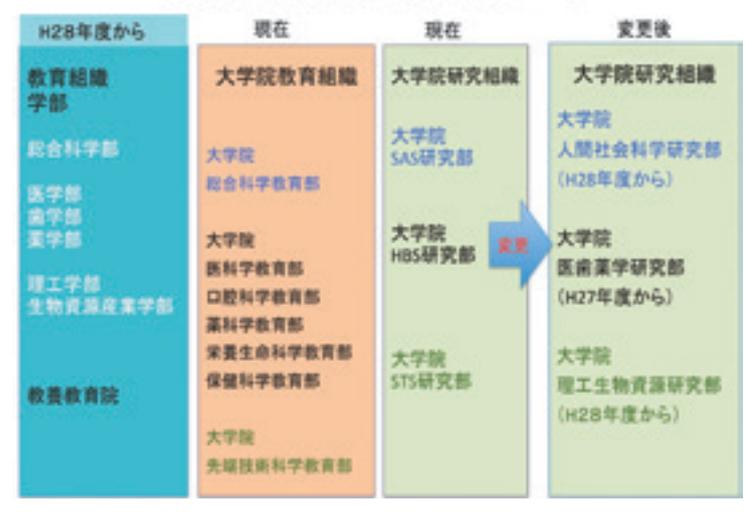
連分野の担当者および医歯薬学部の担当者を集積するとともに、外部から教員を招聘し準備をしています。なお、この改革には教員数の純増は認められていないので、常三島地区の教員の定年などにより生じるポストを利用した改革になります。新学部の設置については、「意見伺い」を行い、大学設置・学校法人審議会で学部新設の審査をうけることとなり、膨大な「設置計画書」を平成27年3月末までに文部科学省に提出する予定です。順調にゆけば、8月末には認可されると予想しています。この改革に伴い、総合科学部は主に文系の教員による教育を行う改組が行われています。さらに、学内の研究体制および研究支援体制の見直しも行う予定です。例えば、新規に理工生物資源研究部と人間社会科学研究部が教員組織として新設される予定です。（図2参照）また、徳島大学改革のもう一つの柱は、教養教育に関する改革ですが、これらの改革については別の機会に述べさせていただきたいと思っています。

4. おわりに：継続的大学改革が必要

少子高齢化と財政の悪化により、国立大学の数を減らすことを財務省は計画していると想像されています。徳島大学は、教育・研究・地域貢献においてさらに成果を上げ、そのことにより大学の存在価値を高めることができるシステムを構築しなければなりません。それが大学改革の目的であり、継続して改革を実行し、その目的を達成しなければ生き残れないと考えています。最後になりましたが、教職員の皆様の丸となって実行されている改革を、強力に支援してゆきますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

●図2

徳島大学大学院研究部の名称の変更について



勝沼奨学基金設立、その重さを感じながら

■ 医科学教育部教育・研究委員長 勢井 宏義

2013年11月、徳島大学名誉教授で元医学部長、勝沼信彦先生が逝去された。

勝沼先生は、酵素学の世界的権威であり、現在の疾患酵素学研究センターの礎を築かれた。私自身、学生時代に生化学の一部としてその講義を聴いた。生化学が苦手だった私は、勝沼先生の試験を本試も再試も落とした。でも、その講義は好きだった。最先端の酵素学の話は国際的でスケールが大きく、話し方もとても魅力的だった。講義が終わった後、将来は基礎研究者でもいいなあ、と思うようになっていた。もちろん、それだけが理由ではないが、あれから35年経った今、私は基礎医学の教授として同じ教壇に立たせてもらっている。

2014年、徳島大学は基礎医学研究の発展に貢献する研究者育成のため、「勝沼奨学基金」を設立した。これは、勝沼先生のご遺志としてそのご家族よりご寄付いただいたものを基に運営される。その事業のひとつである「勝沼奨学金」は、医科学教育部博士課程（基礎医学分野に限る）および栄養生命科学教育部博士後期課程の2年次以上を対象に、独創的な研究を行っている優秀な学生に奨学金を授与し育成支援を行うものである。この支援は2015年度より開始される。

近年、医学領域における大学院への進学率低下が示

すように、基礎医学研究を目指す学生が激減している。給料が安くても人類に役に立つ国際的な仕事がしたい、そのような想いを抱かせる魅力的な研究や講義ができていない私にも大きな責任がある。今回、勝沼先生そしてご家族のお気持ちに対して、私たち基礎医学の教育・研究に携わる者の責務は重い。このままの状態が続けたら、勝沼先生から試験を落としたときにいただいた、穏やかな笑みを浮かべながらの叱咤激励ではなく、二刀流の竹刀で打ち込まれるような叱責を受けるに違いない。

徳島大学から第2第3の勝沼先生を輩出できるように、本基金を大切に使用させていただきながら、教員も学生も一緒に大きく前へ進みたい。



勝沼信彦記念ギャラリー

酵素学研究拠点シンポジウム(勝沼信彦名誉教授追悼記念講演会)報告

■ 疾患酵素学研究センター 木戸 博



勝沼信彦名誉教授

2014年11月14日第7回共同利用・共同研究「酵素学研究拠点シンポジウム」として、“勝沼信彦名誉教授追悼記念講演会”が藤井節郎記念ホールで開催されました。勝沼信彦名誉教授は2013年11月10日肺炎のため87歳で逝去され、その一周忌に当たり学内外からの参加者による追悼式典と講演会が行われました。先生は、1961年に我が国で最初の酵素学研究施設、本学医学部附属酵素研究施設の初代教授として着任され、1992年に退官されるまでの30余年間、最先端酵素学研究を我が国と徳島大学に導入し、酵素学研究を牽引されてこられました。生化学、分子生物学研究を推進した世界の多くのノーベル賞受賞者から一目を置かれ、親しく交流を通して得た自然科学、医学研究に向かう姿勢を余すことなく学生、若手研究者に伝え、

門下生から全国に35名の教授を輩出して、自然科学における先生の哲学は大きく展開しております。詳細は、同日開所されました「勝沼記念ギャラリー」をご参照ください。また先生は、医学部長、酵素科学研究センター長として活躍され、徳島大学医学部とセンターの発展に大きく貢献されてこれられました。

追悼記念講演は、海外から Vito Turk 教授 (J.Stefan Institute 前所長) による“リソゾーム酵素とその阻害剤研究— 50年間の成功の歴史”、門下生の木南英紀 (順天堂大学学長)、津下英明 (京都産業大学教授)、木戸博 (疾患酵素学研究センター特任教授) による“プロテアーゼ研究から創薬、医学応用研究への歩み”についての講演でした。全国から112名の参加者と学内62名の参加者が、勝沼信彦先生の鋭い直観力に裏付けされた先駆的な研究の数々と、温かく魅力溢れる先生を思い起こす場になりました。改めて先生のご冥福をお祈り申し上げます。

旬の
研究紹介

MRIアーチファクトを生じない生体医療用合金の開発

■ 生体材料工学分野 教授 濱田 賢一

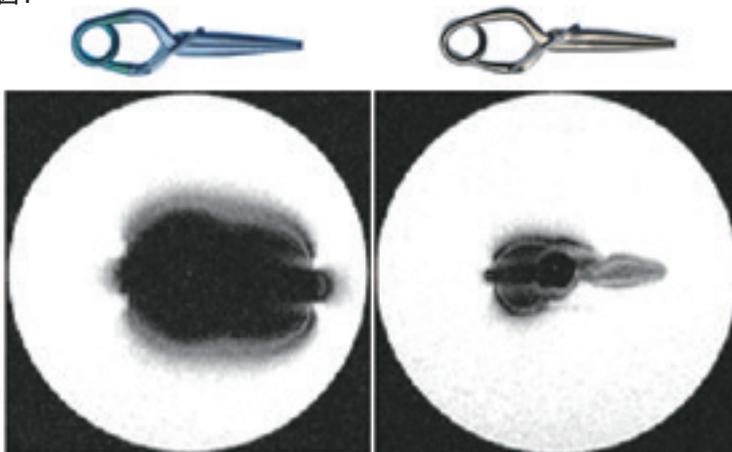
X線CTとMRIは体内の3次元イメージングに効果的である利点は共通していますが、MRI固有の利点として医療被曝がない点、また、アレルギー・リスクのある造影剤を使用しなくても撮像できる組織が多い点が挙げられます。両者は撮像原理が異なることから得意とする撮像対象が異なり、X線CTがより適切であるケースも多く存在しますが、被曝量に留意する必要があります。医療被曝は通常、被曝のデメリットを診査のメリットが上回ることで正当化されますが、必要な画像情報が得られるならば、より低侵襲であるMRIの使用が合理的でしょう。

MRIの欠点の一つは、金属製医療用デバイスが留置されていると、画像の歪みや黒い影などの金属アーチファクト（偽像）が生じ、正確な画像情報が得られない点です。医療用デバイスが設置されている箇所はまさに患部であり、そのイメージングが困難であるのは大きな欠点です。金属アーチファクトの主因は、その金属と周囲の生体組織との磁化率（外部磁場に対して生じる内部磁場の強さの比率）が一致せず、デバイス周辺の磁場が歪むことにあります。この磁化率アーチファクトを解消するには、生体組織と同じ体積磁化率（ $\sim 9 \times 10^{-6}$ 前後）を示す金属が必要です。このような金属でMRIアーチファクトフリーとなるデバイスを作製できれば、MRIの適用症例を拡大可能です。特に金属アーチファクトを生じやすいグラジエントエコー（GE）法での撮像を行う血管撮影（MRA）の適用を拡大できれば、脳動脈瘤塞栓用コイル、脳動脈クリップ、ステント等を血管内外に留置した後の

経過観察に造影CTを使用する必要はなくなり、より低侵襲な診査が可能です。

本研究では磁化率が負、つまり反磁性元素であるAuを基にした合金の開発を行っています。最初に開発したAu-Pt合金では脳動脈瘤塞栓用コイルを試作し、アーチファクトの抑制に成功しました。次に、Nb添加により強化したAu-Nb-Pt合金を開発し、脳動脈クリップを試作したところ、市販のTi合金製クリップと同等の閉鎖力を示すとともに、低アーチファクトであることを確認しました（図1）。しかし、この合金は変形能が低いことから、大きく拡張して用いるステントを想定したAu-Pd基合金を開発中です。これまでに、第3元素を添加することでAu-Nb-Pt合金より強度、変形能ともに優れた合金を開発し、耐食性も高いことから体内で長期的に使用可能と考えています。しかし、血流に曝されるステントには摩耗の可能性があり、Pdの放出による金属アレルギーのリスクを想定する必要があります。そこで、生体親和性に優れた非貴金属元素であるNb, Ta, Ti, Zrを第2元素とするAu合金の研究も開始しました。1種類の合金であらゆるデバイスに対応できるのが1つの理想ですが、各デバイスに特性を最適化した合金を揃え、更にアーチファクトを抑制した種々のアーチファクトフリー・デバイスの実用化を目指しています。そのためには臨床に即した評価が重要です。様々な分野の先生方の御協力を頂戴できれば幸甚に存じます。

● 図1



市販チタン合金製クリップ(左)と
試作Au-Nb-Pt合金クリップ(右)の
MR画像
(GE法、TR/TE=200/18ms)。

● 試作協力:

田中貴金属工業株式会社
ミズホ株式会社

● 撮影:

歯科放射線学分野 菅田 栄一教授

中津峰山如意輪寺の 馬頭観音を訪ねて

■ 動物資源研究部門 松本 高広

阿波三峰の1つ中津峰の中腹に建つ如意輪寺には馬頭観音が祀られており、本学医学部の臨床講座では実験動物の慰霊として古くからこの馬頭観音をお参りしてきたという経緯を苛原研究部長より伺った。今でも産科婦人科学分野では毎年供養に詣ることが恒例となっている



如意輪寺馬頭観音

そうだ。今回はこの馬頭観音について山田戒乗住職に話を伺いにお寺を訪ねることにした。訪ねたのは冬の日の午後、今では門前まで車で行くことができるが、車内においても標高が高くなるに連れて気温がぐっと下がるのが感じられる。その昔は参詣するにも大変な体力を使わねばならなかったことだろう。正面参道の石段は大変急で、晴れ上がった冬の日に急勾配の石段を登ると一步一步と神聖な存在に近づいて行くような、そんな厳粛な気分になる。

住職曰く、本学の旧第一外科出身で、徳島市民病院院長も務められた矢野嘉朗先生が中心となり、さまざまな開業医にも呼びかけ、実験動物、愛玩動物（ペット）、畜産動物の慰霊を願って馬頭観音像が昭和53年11月に建てられたそうである。如意輪寺の馬頭観音は、馬の頭の形を頭上の宝冠に頂いた観音像で、忿怒（ふんぬ）相を浮かべている。通常、観音様は皆優しい顔をした柔和相であるが、馬頭観音は怒りの表情をうかべ、用心棒として観音様を守り、頭上の馬が馬草を喰らうが如く煩惱を食べるとのことだ。まだ馬が移動や荷運びの手段だった時代、馬が急死した路傍や芝先などに馬頭観音が多く祀られ、動物への供養塔としての意味合いが強くなっていったようである。

●表1 平成25年度動物種別日平均動物数

	マウス	ラット	ウサギ
動物資源研究部門	29,724	1,664	42
栄養学科動物室	54	58	0
歯学部動物室	585	80	0
薬学部動物飼育実験室	218	43	0
疾患プロテオゲノム動物室	9,225	0	0
総合科学部動物実験室	30	15	0
工学部動物実験室	61	0	2

平成25年度の集計では、本学全体で397件の動物実験計画書に基づき、動物実験が実施された。各部局主要動物施設の動物飼育数を表1に示した。医歯薬学部、栄養・保健学科に加え、疾患酵素学研究センター・疾患プロテオゲノム研究センター・新設の藤井節郎記念医科学センターと3つの研究所を擁する本学の医科学ならびに生命科学・教育は動物実験がその礎になっていると言って過言でない。毎年9月の動物愛護週間にはヘルスバイオサイエンス研究部の実験動物慰霊祭が執り行われてきた。本年は医歯薬学研究部として実験動物慰霊祭の元年ともなる。こうした折、実験動物の冥福を祈ると共に、生命科学の発展が尊い動物の命の犠牲の上に成り立っていることを今一度確認し、日々精進していくことを誓いたい。

如意輪寺の馬頭観音様は素朴なたたずまいで、今日も中津峰より見守っていることだろう。



実験動物慰霊祭の様子

Center News ②

医療教育開発センターニュース

取組紹介

●組織横断型教育クラスターによる大学院教育支援

平成21年度より教育クラスターによる大学教育支援が継続されており、当センターでは6つのクラスター活動を支援しています。

■クラスターコアセミナー

6クラスター合わせて30回以上開催されます。
 (詳細：医療教育開発センター HP <http://www.hbs-edu.jp/index.html>)

■ミニリトリート クラスター毎に企画、実施されています。

クラスター	日時	ミニリトリート参加人数(人)				
		院生	学部生	教員	講師	計
感染・免疫	H26.10.30-31	11	2	26	1	40
心・血管	H27.1.10-11	13	3	9	1	26
ストレスと栄養	H27.1.20	23	8	7	1	39
肥満・糖尿病	H27.1.23-24	7	0	13	1	21
骨とCa	H27.1.25	14	1	15	2	32
脳科学	H27.1.31	16	10	15	1	42
合計		84	24	85	7	200



●第6回シミュレーション医療教育WS(医学部FD)

医療の質と安全性の向上には個々の診療技術を向上させる事とともに、ノンテクニカルスキルを習得できるシミュレーション教育が不可欠です。学部教育における基本的診療技能実習の向上を目指し「腹部診察」をテーマに、指導に携わる教員FDを開催しました。

- ◎日 時/平成27年1月19日(月)
15:00～17:00
- ◎場 所/スキルス・ラボ4
- ◎講 師/岩田 貴 (医療教育開発センター)
- ◎参加人数/3名



●高校生医学体験実習

毎年スキルス・ラボにて多くの高校生を対象に、医学への関心向上を目的とした「医学体験実習」が行われています。指導補助として医学部医学科の学生が参加することもあります。高校生と先輩学生との貴重な交流の機会になると同時に医学生の学習の機会にもなっています。

- ◎徳島県主催 高校生医学体験実習/
平成26年8月6日(水)～7日(木) 参加72名(学生補助11名)
- ◎香川県丸亀高校医学体験研修/平成26年10月1日(水) 参加47名
- ◎高松第一高校/平成26年10月2日(木) 参加22名
- ◎徳島県立城東高校/平成26年10月23日(水) 参加13名
- ◎岡山県立玉島高校/平成26年10月28日(火) 参加2名
- ◎徳島県立城東高校/平成26年11月15日(土) 参加15名
- ◎徳島県立脇町高校/平成26年12月16日(火) 参加5名
- ◎徳島市立高校/平成26年12月24日(水) 参加44名(学生補助4名)



●第8回チーム医療入門～蔵本地区1年生合同WS～ 「高齢化社会をむかえた医療のあるべき姿」

医療人を目指す学生が相互理解を深め、将来ともに円滑なチーム医療を行える基盤形成を目的として、蔵本地区の1年生全員を対象として毎年行われています。

今年は高齢化社会をテーマに取り上げました。

- ◎日 時/平成26年9月30日(火)
13:00～17:00
- ◎場 所/大塚講堂大ホール 他
- ◎参加人数/433名(全1年生の99%)
- ◎演 題/高齢者医療の現状と向き合おう
- ◎講 師/服部 万里子先生
(公益社団法人 長寿社会文化協会 理事長)



●医療教育開発センター特別講演会

在宅のケアマネジメントに豊富な知識と、実績を持つ服部先生をお招きし、病院と在宅の連携について学びました。学外の参加者も多く、日頃の現場における悩みなどについて意見交換を行いました。

- ◎日 時/平成26年9月29日(月)
19:00～20:30
- ◎場 所/スキルス・ラボ7(総合研究棟2階)
- ◎参加人数/33名
- ◎演 題/在宅医療と高度急性期病院との連携
- ◎講 師/服部 万里子先生 (公益社団法人 長寿社会文化協会 理事長)



●第4回 How to 医療コミュニケーション教育(HBS 研究部FD)

現在、医学科、保健学科、歯学科、薬学部で行われている模擬患者参加型教育の充実を目指して、模擬患者、教員がともに学び、意見交換を行いました。

- ◎日 時/平成26年12月20日(土)
13:00～16:00
- ◎場 所/日亜メディカルホール
- ◎参加人数/34名
- ◎演 題/模擬患者参加型教育を成功に導くために
- ◎講 師/吉田 登志子先生
(岡山大学 医療教育統合開発センター)



●ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学

学生スキルス・ラボ研修

昨年度に引き続き、保健学科留学生を交えた研修を開催しました。

- ◎日 時/平成26年11月12日(水)
13:00～15:00
- ◎参加者/留学生1名
医学科学生5名
保健学科学生6名



●第3回模擬患者参加型教育検討会

- ◎日 時/平成27年3月17日(火) 17:00～
- ◎場 所/スキルス・ラボ5・6(医学部第三、四会議室)

●第7回医療教育講演会

- ◎日 時/平成27年3月2日(月) 15:30～17:00
- ◎場 所/医学部臨床第二講堂(臨床講義棟2階)
- ◎講 師/市橋 亮一先生(総合在宅医療クリニック 代表)
- ◎演 題/自分は何をこの世にのこすのか?…考えよう

●第2回医療教育開発センター特別講演会

- ◎日 時/平成27年3月2日(月) 19:00～20:30
- ◎場 所/スキルス・ラボ5・6(医学部第三、四会議室)
- ◎講 師/市橋 亮一先生(総合在宅医療クリニック 代表)
- ◎演 題/多職種のための在宅がん緩和へのアプローチ…地域づくりのヒント

●第2回学部連携 PBL チュートリアルトライアル

- ◎日 時/平成27年3月24日(火)、26日(水) 17:00～18:30
- ◎場 所/スキルス・ラボ5・6(医学部第三、四会議室)

四国5大学連携による女性研究者活躍推進コンソーシアム形成事業

■ 徳島大学AWAサポートセンター長 山内あい子

1. すべての女性が輝く社会づくり

2014年9月、第2次安倍内閣に「すべての女性がその生き方に自信と誇りを持ち、活躍できる社会をつくるため」として、女性活躍担当大臣が誕生しました。女性の活躍推進・ウーマノミクスは政府の目玉政策の一つであり、首相官邸には「すべての女性が輝く社会づくり本部」が置かれ、2015年度予算にも「女性のチャレンジ応援プラン」が盛り込まれています。しかしながら、研究者に占める女性の割合は、緩やかに増加しつつあるものの、2013年3月末で14.4%と、諸外国と比べるとまだ低いのが現状です。また、管理職に占める女性比率は11.1%(2012年)と先進国の中では極めて低いことから、政府は役員・管理職への女性登用「2020年30%」の目標を掲げています。

2. 四国における女性研究者支援環境の醸成

本学においては、2010年度文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業で徳島大学AWA(OUR)サポートシステムを立上げ、AWAサポートセンターが実施母体となって男女共同参画の推進と女性研究者支援環境の整備を行って参りました。また同年度から、香川大学男女共同参画推進室 olive heart で「香大発、地域ぐるみ女性研究者支援の高波」事業が、愛媛大学女性未来育成センターでは「坂の上の雲」事業が実施され、3年後の事後評価では3大学揃って“A”評価をいただきました。高知大学では、2012年度より男女共同参画推進室しあわせぶんたんが中心となって女性研究者支援事業を展開しています。2011年2月には、四国5大学学長による男女共同参画推進共同宣言が発表されました。このように四国の国立大学は、それぞれ、地元の大学、企業、地域や行政機関とも連携して女性研究者支援活動を行う体制を着実に構築してきました。都市部に比べて四国地区における少子高齢化の進行は深刻であることから、四国にとって女性の力は単に人材の確保にとどまらず、地域社会全体に活力を与えるために必要不可欠となっています。

3. 四国5大学連携による

女性研究者活躍推進コンソーシアム形成事業

四国には、四国国立大学協議会が設立されており、2012年度より「四国5大学連携による知のプラットフォーム形成事業」が実施されています。この連携事業の仕組みを活用して、さらに男女共同参画を推進し、女性研究者がその能力を最大限発揮し活躍することができる環境を共同で実現する取組を進めることになりました。そのため、2014年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」【連携型】に提案した「四国5大学連携による女性研究者活躍推進コンソーシアム形成事業」(図1)が採択され、幸いにも3年間の支援をいただけることになりました。

本事業では、徳島大学を代表機関、香川大学、愛媛大学及び高知大学を共同実施機関とする4大学に、鳴門教育大学や企業等を加えた女性研究者活躍推進コンソーシアムを構築します。2014年12月の四国国立大学協議会(5大学長会議)での決議を受けて、各大学で「女性研究者の管理職登用行動計画」を策定し、上位職への女性の積極登用を行います。また、女性研究者を代表とする共同研究プロジェクト支援、国際学会参加支援、連携シンポジウムや研修セミナー、研究交流発表会の開催等の取組により、ライフイベントに配慮しつつ女性研究者の研究力向上を図ります。さらに、2014年度も徳島大学AWA(OUR)サポートシステム女性研究者プロジェクトによる女性研究者の准教授・講師への学内昇進が実現し、女性活躍推進策が継続的かつ効果的に講じられています。

4. 2014年度徳島県女性医療従事者支援事業

2014年に施行された医療介護総合確保法に基づき、徳島県の女性医療従事者支援事業としてAWA(OUR)サポートシステム事業が採択されました。これにより、女性医療従事者の仕事と家庭の両立支援のための相談体制整備や支援員配置等の取組を実施しています。引き続き皆様のご協力とご支援を賜りますようお願いいたします。



交流会

「蔵本地区国際交流の夕べ」を開催して

■ 国際課蔵本分室 国際コーディネーター 村澤 普恵

平成26年12月16日(火)、キッチンSAKULA(蔵本キャンパス 蔵本会館1階)で、「蔵本地区国際交流の夕べ」(主催：大学院ヘルスバイオサイエンス研究部、疾患酵素学研究センター、疾患プロテオゲノム研究センター)を開催しました。この交流会は、母国を遠く離れて徳島に暮らす留学生が、相互に、また教員や日本人学生とも交流を深め、研究の成果ばかりでなく、徳島での楽しい思い出を母国に持ち帰ってもらうことを目的として、2005年に始まり、今回で11回目となりました(2005年は6月と12月に開催)。このたびは、蔵本キャンパスに学ぶ16か国の留学生とその家族、教員、日本人学生合わせて約100人が参加しました。開催当初は留学生と教員参加による交流会でしたが、しだいに海外に興味を持つ日本人学生も参加するようになりました。

交流会は、勢井宏義医学部長補佐(統合生理学教授)の開会のご挨拶で始まり、参加者は、寿司、エビフライ、チキンの丸焼きなど、キッチンSAKULA心づくしのたくさんの料理に舌鼓を打ち、日本語や英語を交えながら大いに交流しました。宴もたけなわとなったところ、ポーランドやバングラデシュの留学生によるプレゼンテーション/「お国紹介」や日本人学生によるモンゴルのホーミー(モンゴルに伝わる伝統的な喉歌と呼ばれる発声法で、低い声と甲高い声を同時に発声する)などが披露され、参加者は熱心に耳を傾け、また大きな拍手を送っていました。

交流会では、会話のきっかけになれば、また日本文化や日常生活の一端を留学生に知ってもらえればとの思いから、毎年、会場で受け付け時に、日本のおもちゃや、台所用品、身の回り品などの日用雑貨をラッピングして参加

者全員にプレゼントしています。100個のプレゼントの中には、けん玉、シャボン玉作りおもちゃ、紙風船などもあり、それらを手にした留学生やそのお子さんたちは、日本人参加者に遊び方を訊きながら遊び始め、それをきっかけに交流の輪が広がりました。そして、徳島と言えば、何と言っても阿波踊り。締めくくりとして、留学生、日本人と一緒に輪になって踊り、交流会の幕を閉じました。

毎年交流会に参加していた留学生が無事卒業、帰国し、年末の交流会で顔を見られなくなる寂しさがある一方、入学したばかり、徳島に来たばかりという新留学生との新しい交流が始まるのはとても嬉しいことです。徳島大学には28か国219人、その内蔵本キャンパスには16か国61人の留学生が在籍しています(平成27年1月1日現在)。「グローバル化」が叫ばれる現在、本学でも、外国語によるコミュニケーション能力を鍛えること、留学生のさらなる受入れ、日本人学生の短期・中長期留学推進を柱とし、大学全体のグローバル化が推進されているところです。交流会は、まさに小さなグローバル社会です。留学生にとっては、日本文化や徳島大学について知り、新しい友人を作る良い機会ですし、日本人学生にとっては、キャンパスにいながらにして、いろいろな国の留学生と英語でコミュニケーションを図り、異文化/多文化に触れられる絶好の機会です。この交流会でのたくさんの出会いが、留学生にとって楽しい思い出の一つになるとともに、本学への留学増加や日本人学生の海外留学促進につながれば、こんなに嬉しいことはありません。

交流会は今年も12月に開催の予定です。蔵本地区の皆さん、交流会でぜひお会いしましょう!!



交流会の様子



ポーランドのお国紹介…ベグソソカ・トーマス・ダニエルさん(右)とブラジエル・アネタ・マダレナさん(ともに口腔科学教育部)



ホーミーを披露する
吉田規朗君
(医学科3年)



最後に記念撮影

新任教授ご挨拶



■ Professor of Nursing, PhD, FAAN.

Ruzzano C. Locsin

My PhD in Nursing is from the University of the Philippines and my Master of Arts in Nursing is from Silliman University in the Philippines. I migrated to the USA in 1984 but moved to Florida as an academician in 1991 at Florida Atlantic University (FAU) in Boca Raton. My program of research focuses on “life transitions in human health and well-being.” My middle range theory is entitled **Technological Competency as Caring in Nursing**, published in 2005. As Professor Emeritus of FAU, and currently Professor of Nursing at Tokushima University, my goals include fostering internationalization activities for faculty and students, and enhancing collaborative, interdisciplinary research and scholarly works with colleagues in nursing and the health sciences.



■ 麻酔・疼痛治療医学分野 教授

田中 克哉

平成26年10月1日付で麻酔・疼痛治療医学分野教授を拝命いたしました。私は香川県出身で、平成2年に徳島大学医学部医学科を卒業しました。同年に徳島大学麻酔科に入局して、一貫して麻酔科学の研究、特に吸入麻酔薬による心筋保護効果の作用機序について研究を行ってまいりました。今後も麻酔薬が循環器系に及ぼす影響について基礎研究を行いながら、術後の合併症を改善するための臨床研究や臨床応用に取り組み、研究マインドを持った医師の育成を目指してまいります。徳島大学麻酔科から臨床的に有意義で興味深い研究内容を世界に向けて発信していきたいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



■ 代謝栄養学分野 教授

阪上 浩

平成26年10月1日付で代謝栄養学分野教授を拝命いたしました。私は平成元年に神戸大学医学部医学科を卒業後、神戸大学第2内科で糖尿病診療を中心に研鑽し、スタンフォード大学医学部に留学する機会を頂きました。留学後は、神戸大学COE研究員・糖尿病内科助教、近畿大学薬理学教室講師として研究、教育、臨床に従事し、平成20年より准教授として本学に着任しております。私は一貫して糖尿病の研究を行い、現在は生活習慣病全般に焦点を当て、肥満による病態の解明及びその栄養介入研究に取り組んでいます。栄養学における研究者や教育者の育成とともに、今後は臨床栄養でも世界をリードし得る指導者の育成に尽力したいと考えています。引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



■ 臨床食管理学分野

竹谷 豊

平成26年11月1日付で臨床食管理学分野の教授を拝命いたしました。私は、兵庫県南あわじ市の出身で、平成4年に徳島大学医学部栄養学科を卒業、平成6年に大学院栄養学研究科博士前期課程（医学部生化学講座）を修了後、医学部助手（病態栄養学講座）として採用され、以後、栄養学科にて教育・研究に取り組んできました。この間、カルシウム・リン代謝異常、糖・脂質代謝異常、慢性腎臓病の病態ならびに栄養療法に関する研究を行ってきました。今後も、臨床への応用を目指した研究・教育活動を推進し、次代の栄養学を担う管理栄養士・栄養学研究者の育成に貢献したいと考えております。引き続きご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



■ 形成外科学分野 教授

橋本 一郎

平成26年12月1日付で形成外科学分野を担当させていただくことになりました。私は昭和63年徳島大学を卒業し、当時の皮膚科内形成外科診療科に入局致しました。形成外科が独立した後は徳島大学形成外科学分野で研究と臨床、教育を続けて参りました。豪州メルボルン大学マイクロサージャリー研究所、セントビンセント病院に留学する機会があり、マイクロサージャリー技術を用いた tissue engineering の研究や、臨床手術に参加することができました。徳島大学では、血管に対する解剖学的所見に基づいた新しい皮弁の開発や、安全な皮弁移植のための新しいモニタリング手技の開発などに従事して参りました。これからも臨床の最先端を行くための研究を続けて参る所存です。引き続きご指導いただきますようお願い申し上げます。



■ 血液・内分泌代謝内科学分野
(旧：生体情報内科学分野)

安倍 正博

平成27年1月1日付で生体情報内科学分野を担当させて頂くことになりました。1984年に徳島大学を卒業後、第一内科に入局し、現在は血液内科を専門としております。平成元年にテネシー大学に留学し、免疫グロブリンの蛋白化学やモノクローナル抗体の作製法を研究させて頂き、この時形質細胞の腫瘍である多発性骨髄腫の基礎研究の面白さに触れました。そして帰国後一貫し、多発性骨髄腫の病態の解明と治療法の開発に取り組み、多面的に研究を展開して参りました。現在は各種難治造血器疾患に対する新規阻害薬や抗体・免疫療法の開発、そして造血、骨形成など組織の再生を目指した研究も進めております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

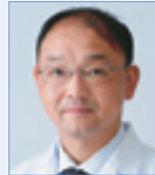
新任教授ご挨拶



■ 顕微解剖学分野 教授

鶴尾 吉宏

平成27年2月1日付で顕微解剖学分野教授に就任いたしました。私は、昭和57年に徳島大学医学部を卒業後、本学医学部解剖学第2講座、同第1講座、さらに和歌山県立医科大学医学部解剖学第1講座にて一貫して解剖学の教育と研究に携わってきました。大学卒業後、本学大学院にて、視床下部・下垂体系による神経内分泌の研究を開始し、スウェーデン、カロリンスカ研究所に留学後、ステロイド代謝酵素に関する研究を進めました。その後、和歌山県立医科大学の教授として、解剖学の全分野における教育ならびに研究指導を行ってきました。今後は、本学の学生が興味を持って人体の構造を学べる魅力ある解剖学教育を行い、新しい発想を持って研究を進められる若い研究者を育てたいと考えています。皆様方にはどうぞ宜しくお願い申し上げます。



■ 疾患病理学分野(旧：環境病理学分野) 教授

常山 幸一

平成27年2月1日付で、環境病理学分野教授を拝命いたしました。私は平成4年に金沢大学医学部を卒業後、同病理学第2講座に入局しました。大学院時代にはカリフォルニア大学デービス校に留学し、肝臓を標的とする自己免疫疾患の病態解析研究を開始し、以後一貫して肝臓病理学研究に従事しております。平成14年に富山大学附属病院病理部に異動後は、和漢薬研究など地域に根ざした研究にも対象を広げ、病理診断の研鑽や学生教育の充実にも注力してまいりました。これからも、魅力溢れる研究、正確で信頼される病理診断、興味を引き出す学生教育を継続し、若手病理医の育成にも全力で取り組んでいく所存でございます。ご指導ご鞭撻のほどを何卒宜しくお願い申し上げます。



■ 寄附講座 地域医療人材育成分野 特任教授

川人 伸次

平成27年2月1日より地域医療人材育成分野を担当させていただいております。私は平成3年に徳島大学医学部を卒業し、徳島大学医学部麻酔学教室(現：麻酔・疼痛治療医学分野)に入局いたしました。平成7年に徳島大学大学院医学研究科博士課程を修了後、高松赤十字病院で臨床研修し、その後は徳島大学で心臓麻酔を中心に臨床・研究・教育に従事して参りました。平成11年から2年間、米国ペイラー医科大学で体外循環・人工臓器の研究を行い、帰国後は周術期の呼吸・循環・代謝管理の研究を行っています。今後は麻酔科医として地域医療に貢献し、人材育成に尽力したいと考えています。ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



■ 寄附講座 地域医療人材育成分野 特任教授

谷 洋江

平成27年2月1日付で地域医療人材育成分野の特任教授に就任いたしました。私は徳島大学病院での臨床経験の後、徳島大学において看護学の教育・研究に携わるようになりました。その間、千葉大学大学院に進み、1型糖尿病患者と家族への看護援助をテーマに研究に取り組んで参りました。また地域貢献として、子どもの虐待予防のために育児期の家族の支援について研究しております。本分野では、愛媛県からの寄附により四国中央病院において、地域医療に従事する人材育成を行うことを目的としています。看護師を含む医療人材を一体的に養成するためのプログラム研究を行います。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

学会賞等受賞者紹介

創業懇話会2014in岐阜 最優秀ポスター賞

■ 田良島典子 [生物有機化学分野・大学院生]



- 平成26年7月11日受賞
- ナノ核酸デバイスを利用したsiRNA-タンパク質相互作用における分子認識機構の解明

第39回製剤・創剤セミナー Postdoctoral Presentation Award

■ 安藤 英紀 [がん代謝学分野・特任教授]



- 平成26年7月11日受賞
- microRNA 全身送達による新規がん治療戦略

第46回若手ペプチド夏の勉強会 優秀講演賞、優秀討論賞

■ 辻 耕平 [機能分子合成薬学分野・大学院生]



- 平成26年8月5日受賞
- 二量体化したCXCL14 C端側領域はCXCL12アンタゴニストとなる

第46回若手ペプチド夏の勉強会 優秀ポスター賞

■ 中村 太寛 [機能分子合成薬学分野・大学院生]



- 平成26年8月5日受賞
- 第二世代hGM2AP完全化学合成法の開発研究

第46回若手ペプチド夏の勉強会 優秀ポスター賞

■ 小宮 千明 [機能分子合成薬学分野・大学院生]



- 平成26年8月5日受賞
- アスパラギン誘導体を用いたインティン模倣型ペプチド結合切断システムの開発

第46回若手ペプチド夏の勉強会 優秀ポスター賞

■ 宮島 凜 [機能分子合成薬学分野・大学院生]



- 平成26年8月5日受賞
- 天然型アミノ酸配列からのチオエステル合成

学会賞等受賞者紹介

European Society of Cardiology(ESC) Congress 2014 Young Investigator Award

■坂東左知子 [循環器内科学分野・大学院生]



- 平成26年8月31日受賞
- Relationship between NLRP3 inflammasome activation in adipose tissue and atherosclerosis

アンチセンス・遺伝子デリバリーシンポジウム2014 奨励賞

■田良島典子 [生物有機化学分野・大学院生]



- 平成26年9月9日受賞
- ハイブリッド型化学修飾核酸2'-O-MOE-4'-thioRNAの合成とアンチmiRNAとしてのin vitro/vivo機能評価

第13回次世代を担う若手ファーマ・バイオフォーラム2014 優秀発表賞

■北風 圭介 [創薬生命科学分野・大学院生]



- 平成26年9月20日受賞
- 改変型ヒト β -HexosaminidaseのGM2蓄積症モデルに対する有効性評価

第62回日本心臓病学会学術集会 優秀演題セッション 口演1 一般 優秀賞

■西條 良仁 [循環器内科学分野・大学院生]



- 平成26年9月28日受賞
- 僧帽弁血流速波形の前負荷増大に対する反応性には左房機能が関与する

日本歯科理工学会 第64回学術講演会研究奨励賞

■乾 志帆子 [生体材料工学分野・大学院生]



- 平成26年10月4日受賞
- 生体医療用Au2元合金の磁化率の組織依存性

第37回日本生体医工学会 中国四国支部大会 若手研究奨励賞

■山口 雄作 [医用画像機器工学分野・大学院生]



- 平成26年10月4日受賞
- 非線形微分方程式を用いた磁気共鳴画像再構成

日本顎口腔機能学会 第53回学術大会優秀賞

■鈴木 善貴 [顎機能咬合再建学分野・助教]



- 平成26年10月5日受賞
- 切歯路と睡眠時ブラキシズムの分類との関係

2014年度日本歯周病学会学術賞

■細川 義隆 [歯科保存学分野・助教]



- 平成26年10月19日受賞
- 歯周炎病変局所へのリンパ球浸潤機構の解析

第73回日本矯正歯科学会大会 優秀発表賞

■黒田 晋吾 [口腔顎顔面矯正学分野・准教授]



- 平成26年10月21日受賞
- 部分無歯症患者の包括的歯科治療における歯科矯正用アンカースクリューの有用性

第73回日本矯正歯科学会大会 優秀発表賞

■七條なつ子 [口腔顎顔面矯正学分野・大学院生]



- 平成26年10月21日受賞
- 軟食飼育による咀嚼性刺激の低下は下顎骨の恒常性を負に調節する

第73回日本矯正歯科学会大会 優秀発表賞

■森 浩喜 [口腔顎顔面矯正学分野・大学院生]



- 平成26年10月21日受賞
- 変形性顎関節症の病態形成におけるS1P/Smad3シグナルの役割

第18回日本肝臓学会大会 デジタルポスターセッション 優秀演題

■谷口 達哉 [消化器内科学分野・助教]



- 平成26年10月23日受賞
- 肝細胞癌におけるPIVKA-II産生機序の解析 -PARP-1による発現の誘導-

第51回ペプチド討論会 若手口頭発表優秀賞

■津田 雄介 [機能分子合成薬学分野・大学院生]



- 平成26年10月23日受賞
- Preparation of peptide/protein thioesters using a chemical protocol applicable to expressed proteins

第51回ペプチド討論会 ポスター賞

■佐藤 浩平 [機能分子合成薬学分野・大学院生]



- 平成26年10月24日受賞
- Development of N-glycosylated asparagine ligation and its application to total chemical synthesis of GM2 activator protein

第88回日本消化器内視鏡学会総会 デジタルポスターセッション 優秀演題

■宮本 佳彦 [消化器内科学分野・大学院生]



- 平成26年10月26日受賞
- 大腸癌におけるEpidermal Growth Factor Receptor (EGFR)をターゲットとした分子イメージングと薬効評価

第19回日本フードファクター学会(JSoFF) 学術集会ポスター賞

■曾我真美子 [食品機能学分野・大学院生]



- 平成26年11月9日受賞
- マウス繊維芽細胞におけるカロテノイドの脂質ラフト局在性と機能発現機構の解析

第36回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム 優秀発表賞

■原矢(武知) 佑樹 [製剤設計薬学分野・大学院生]



- 平成26年11月21日受賞
- カチオン性ペプチドの細胞膜透過制御機構~アルギニンペプチドのグリコサミノグリカン糖鎖への特異的結合による α -リックス構造形成~

膜シンポジウム2014 学生賞

■原矢(武知) 佑樹 [製剤設計薬学分野・大学院生]



- 平成26年11月27日受賞
- アルギニンペプチドの細胞膜透過性に与えるグリコサミノグリカン糖鎖の影響

第22回(平成26年度) 膵臓病研究奨励賞

■成戸 卓也 [ストレス制御医学分野・助教]



- 平成26年12月1日受賞
- 膵がん細胞におけるゲムシタピン耐性因子のタンパク質発現プロファイルの解明

The 3rd ASEAN Plus and Tokushima Joint International Conference, Poster Presentation Award

■佐藤 南 [口腔顎顔面矯正学分野・大学院生]



- 平成26年12月5日受賞
- Effects of low-intensity pulsed ultrasound on salivary gland.

第105回日本循環器学会四国地方会 コメディカルセッション 奨励賞

■平田有紀奈 [循環器内科学分野・大学院生]



- 平成26年12月6日受賞
- 頸動脈プラークスコア、心臓周囲脂肪厚と冠動脈硬化の関連:超音波検査を用いた検討

平成26年度 徳島大学大学院HBS研究部市民公開講座 開催報告

■ 機能分子合成薬学分野 大高 章



平成26年度のHBS研究部市民公開講座は10月25日(土)に大塚講堂にて175名の方々にご参加いただき、大高が世話人となり薬学部でお世話させていただきました。この直前22日から24日までの3日間、同じく大塚講堂にて第51回ペプチド討論会が開催されました。ペプチド討論会は日本ペプチド学会が主催し、ペプチドに関する化学、構造物性、生理学などに関して討論を行う学術集会です。この討論会に合わせて一般市民の皆様にもペプチドに対する正しい知識を深めていただくために市民フォーラムを開催してまいりました。そこで、本年度の市民公開講座は、日本ペプチド学会市民フォーラム2014を

HBS研究部が共催させていただくという形態で開催させていただきました。タイトルは「生命そして健康を支えるアミノ酸・ペプチド」とし、日本ペプチド学会会長 赤路健一京都薬科大学教授から「“毒ペプチド”の薬」、本学疾患酵素学研究センター 谷口寿章教授から「脳のアミノ酸代謝と病気」というご講演を、さらに企業から「健康に役立つアミノ酸のはなし」を味の素株式会社小林久峰先生から、「健康のための運動をより効果的に～BCAAの話～」を大塚製薬株式会社 草浦佐知先生から、そして東京薬科大学 野水基義教授から「再生医療にも使えるペプチド」のお話を頂きました。いずれも比較的身近な話題から入り、アミノ酸・ペプチドが私たちの生命そして健康維持に、いかに重要な働きをしているかをわかりやすくお話しいただき、一般の皆様へのペプチドなどに対する正しい知識の普及に役立つものと考えております。

スキルス・ラボ7&8(総合研究棟)のご案内

■ 医療教育開発センター長 赤池 雅史

スキルス・ラボの利用件数の増加やシミュレーター数の増加に伴い、総合研究棟2階に、スキルス・ラボ7(CSL7:88㎡)、スキルス・ラボ8(CSL8:112㎡)が新たにオープンしました。どちらも可動壁で4つに分けて使用することができ、講演会、会議、実習、技能試験などに幅広くご利用いただけます。それぞれの部屋にスクリーン、プロジェクター、大型モニターが、CSL8には「四国における e-Knowledge を基盤とした大学間連携による大学教育の共同実施」事業の一環として遠隔会議システム「ポリコム」や電子黒板が設置されています。

また、CSL7には「ボクセルマン ENT シミュレーター Tempo」、CSL8には「バーチャルリアリティ・心エコー用トレーニングシミュレーター VIMEDIX」、「血管インターベンショントレーナー Mentice VIST」の高機能シミュレーターが常設され、各々の使用責任者あるいはその許可を受けた者の立ち会い・指導のもとで、利用できるようになりました。

本施設は時間外でもテンキーでの入室、ご利用が可能です。申し込みはスキルス・ラボオーダーリングシステム <http://study.clin.med.tokushima-u.ac.jp/tsos/login.php>にて、ID/パスワードを取得後、Web 入力してください。

詳細は医療教育開発センター スキルス・ラボ (内) 9631 にお問い合わせください。

医療教育開発センター オフィスアワー 9:00 ~ 17:00
<http://www.hbs-edu.jp/index.html>



藤井節郎記念医科学センター2階へ

学会情報

日本膜学会第37年会

日本膜学会会長：都留 稔了
日本膜学会第37年会組織委員長：斎藤 博幸
開催日：平成27年5月14日(木)・15日(金)
会場：早稲田大学西早稲田キャンパス
問合先：日本膜学会事務局第37年会係
TEL&FAX：03-3815-2818
E-mail：membrane@mua.biglobe.ne.jp

創薬懇話会2015 in 徳島

実行委員長：大高 章
開催日：平成27年7月2日(木)・3日(金)
会場：グランドエクシブ鳴門 ザ・ロジ
問合先：徳島大学大学院医歯薬学研究部
機能分子合成薬学分野
TEL：088-633-7283
E-mail：souyaku2015@tokushima-u.ac.jp

一般社団法人日本看護学教育学会 第25回学術集会

会長：雄西智恵美
開催日：平成27年8月18日(火)・19日(水)
会場：アスティとくしま
問合先：学術集会事務局／医歯薬学研究部 看護学系
TEL：088-633-9046
運営事務局／トップソア株式会社 徳島支店
TEL：088-622-8914
FAX：088-622-9703

第12回日本乳癌学会 中国四国地方会

会長：丹黒 章
(胸部・内分泌・腫瘍外科学分野 教授)
開催日：平成27年9月19日(土)・20日(日)
会場：ホテルクレメント徳島
問合先：学会事務局
胸部・内分泌・腫瘍外科学分野
TEL：088-633-7143
E-mail：surgery2@tokushima-u.ac.jp

退職教授等一覧

- 医学系 長篠 博文 教授 (医用理工学分野) H27.3.31 定年退職
- 歯学系 北村清一郎 教授 (口腔顎顔面形態学) H27.3.31 退職
- 事務部 米原 壽男 事務部長 (医歯薬事務部) H27.3.31 定年退職



編集後記

10年以上にわたり皆さんのお手元にお届けした「HBS研究部だより」が、本号より「医歯薬学研究部だより」へと名称変更になりました。ご存知のようにHBS研究部は、対外的にも分かりにくいという理由から、平成27年4月より医歯薬学研究部に生まれかわりました。しかし、これを単なる名称変更と受け止めるのではなく、教職員が今一度、気持ちを引き締め蔵本キャンパスの研究・教育活動の発展に尽力すべきと考えています。(南川典昭)